

新しい私たちの誕生

[聖書] 使徒言行 2章1～13節

五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話した。さて、エルサレムには天下のあらゆる国から帰って来た、信心深いユダヤ人が住んでいたが、この物音に大勢の人が集まって来た。そして、だれもかれも、自分の故郷の言葉が話されているのを聞いて、あつけにとられてしまった。人々は驚き怪しんで言った。「話をしているこの人たちは、皆ガリラヤの人ではないか。どうしてわたしたちは、めいめいが生まれた故郷の言葉を聞くのだろうか。わたしたちの中には、パルティア、メディア、エラムからの者がおり、また、メソポタミア、ユダヤ、カパドキア、ポントス、アジア、フリギア、パンフィリア、エジプト、キレネに接するリビア地方などに住む者もいる。また、ローマから来て滞在中の者、ユダヤ人もいれば、ユダヤ教への改宗者もあり、クレタ、アラビアから来た者もいるのに、彼らがわたしたちの言葉で神の偉大な業を語っているのを聞こうとは。」人々は皆驚き、とまどい、「いったい、これはどういうことなのか」と互いに言った。しかし、「あの人たちは、新しいぶどう酒に酔っているのだ」と言って、あざける者もいた。

[序] 「自粛」生活延長の中で

おはようございます。お元気で過ごしてはいかがでしょうか？ いいえ、元気ではないのですと仰る方もおられるかも知れません。けれども、元気であっても元気ではなくても、それが一番大事な事ではないですよ。どんな中であっても私たちが神様に繋がっているかどうかということ、いや、私たちが、と言う前に、**神様が今のこの私たちと共にいてくださっていること**を信じること、それがとても大事なことだと思いますし、また、幸いなことだと思うのです。

今日も一緒に神様に思いを向け、礼拝を捧げられますことを感謝しています。今日は、川越教会創立52周年の記念の時でもあります。一緒に焼きそばパーティが出来ないのが残念ですが、主のくすしき御業に感謝を捧げ、神様を一緒に讃美したいと思います。

まず初めに、先週もしたことをしたいと思います。この新型コロナウイルスの感染で、外に出ることを「自粛」する生活が続く中、本当に皆さん頑張っているなあと思いますよね。またこの「自粛」生活も延長ということになっていますけれども、「**お互いよく頑張っているね**」という思いで、また、**拍手をしたい**なあと思います。(拍手)。

本当に、このような状況の中に、神様が道を開いて下さいますようにとお祈りを致します。

[1] 聖霊が降って来た

今日は、**使徒言行録**の聖霊降臨の出来事の個所を一緒に味わいます。とても不思議な出来事です。けれどこれは夢まぼろしのような出来事ではありませんでした。2章12～13節には「人々は皆驚き、とまどい、「いったい、これはどういうことなのか」と互いに言った。しかし、

「あの人たちは、新しいぶどう酒に酔っているのだ」と言って、あざける者もいた。」とあります。本当に目の前で起こった事だったから受け止め切れないでいる正直な描写ではないでしょうか。しかしまた、このことは私たちの理解を超えた出来事とではありますけれども、何か弟子たちが不思議なものに取り付かれたというようにオカルチックに考える必要はなく、とても大きな神様からの贈り物(ギフト)を受けたこととして捉えたらよい出来事だと思います。

ここには私たちの信仰の「原点」があると思います。それは何かと言えば、イエス・キリストが私たちの中に入ってきて下さったという、決定的な出来事がここで起こったというではないでしょうか。復活された主イエス様は、ご自分が天に上げられる(昇天)前に、弟子たちにこう言われました。「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる」(1:8)。聖霊は、何よりもまず、信仰者を「キリストの証人」とする力ですね。その霊が与えられることを約束して、イエス・キリストの地上でのご生涯は終わりました。けれども、死んで過去の人になったのではありません。むしろ聖霊—それはイエス・キリストの霊と言っても良いのです—を送ることによって、弟子たち一人ひとりの中にイエス・キリストが生き始めたということです。これは本当にすごい、救いの歴史(救済史)の転換点です。

やがて、この使徒言行録の8章以下にずっと登場する使徒パウロもガラテヤの教会の人々にこう言いました。「生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしのうちに生きておられるのです。わたしが今、肉において生きているのは、わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子に対する信仰によるものです」(ガラテヤ2:20)と。

詳しい説明は省きますが、この弟子たちが集まっていた五旬祭というのはイスラエルがモーセを通して神様から十戒をシナイ山から授けられたことを記念する「七週の祭」(逾越祭から50日目)の日でした。出エジプト記にある、「神の言葉(律法)」が、神の民を生かす言葉として入ってきた日です。その日に、今度は、「愛」によって律法を成就された主イエスの霊が、信じる者たちの中に入ってきたのです。そのことによって、イエス・キリストの「福音」はユダヤの地にとどまらず、正に「ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで」、つまり全世界に広がっていくのです。そのために神様は、このあと、あのパウロ(熱心なユダヤ教徒でキリスト教徒を迫害していた人物!)をも用いられたのです。

[2] 「新しい人間」の誕生

この、聖霊降臨の出来事の描写はとてもシンボリックです。激しい「風」は、「霊」や「息」とも訳せる言葉のようで、天地創造の時に、主なる神が人間に「命の息」を吹き込んだことを想起させます。つまりここには、聖霊による「新創造」=新しい人間の誕生が描かれています。また、「炎」のような「舌」が、分かれて一人ひとりの上にとどまりました。「炎」の意味の一つは、古い自分が焼かれる、焼いて頂くということだと思います。そして「舌」というのは、「言葉」を与えられるということと共に、そこには責任を伴う「人格」の付与という意味もあるのではないのでしょうか。また、それが「一人ひとりの上にとどまった」とあります。これは素敵な言葉だと思います。主の霊は、一人ひとりの多様な個性を生かす霊として臨まれます。決して「全体主義」ではないのです。そして、それは「上から与えられる」ものとして描かれて

います。クリスチャンとして生きるということは、神様からの賜物(ギフト)に生かされる、ということであって、決して自分のガンバリによるものではないのですね。私たちの救いが、自分の価値によるのではなく、ただ**イエス様の十字架の愛のよる**ものであるのと同じです。

主の弟子たちは、この時から、言わば「**聖霊の器**」として派遣され、用いられていったのです。これは私たちも同じではないでしょうか。弟子たちは、私たち信仰者の先輩です。時代は二千年ほど離れていますけれども、本質的には同じです。イエス・キリストが私たちの内に住んでおられるという点において、私たちは弟子の生きざま、そして死にざまを継承する者と言えるのではないのでしょうか。「それは困るなあ」と思ってしまいませんか。

【3】神様による「整理整頓」

実は、私は数日前に夢を見たのです。今日の聖書箇所とは直接関係がある訳ではありませんが、とても心に迫ってくるある意味リアルな夢だったのです。それはちょっと恥ずかしい話なのですが、自分が住んでいる部屋が、様々なモノで雑然としていて、本棚も溢れているし、床にもモノが置かれたままになっている。埃っぽくなる。それを早く整理しなさい、それはあなたの心の状態なんだ、もっと隙間を作りなさい、ということを促される夢だったのです。確かにずっと気になってはいたのです。でも忙しさを理由に、ほっぽらかしにしていました。これは神様からのサインなのかも知れないと思いました。私という存在を容器に例えるならば、そこが雑然とし、古い最早いらぬものまで後生大事にしていて空間が埋まっていたら、そこはもうごみ溜めようになってしまうだけ。「**それではわたしが入れないではないか**」と神様から言われているような気がしたのです。それで、おとといの金曜日に思い立って整理をしました。これはいけないと思い、不十分ながらかなりモノを整理し始めました。まだ第一弾ですけども、目に見える空間が広がるということは、気持ちがいいこと、自分の心が自由になっていくように思いました。私は本当に整理整頓が下手なんです。

「聖霊」が私たちの中に降るというのは、ある意味、**神様の炎や風**による心の刷新、整理整頓ではないでしょうか。古い己に死んで、さよならして、イエス様にちゃんと住んで頂くということ。イエス様の言葉にも「**たといたくさんの物を持っていても、人のいのちは、持ち物にはよらないのである**」というものがあります。(ルカ 12:15 口語訳)。「モノ」より「命」の方が大事だと誰もが頭では分かっていると思っっていると思いますが、果たして本当にそのような生き方になっているどうか、イエス様は私たちに問いかけているように思います。

使徒言行録は、聖霊が降った弟子たちのその後のことが書かれています。彼らの口に様々な地方の**生まれ故郷の言葉**が与えられました。**生活の言葉**です。その生活には**過ちや恥**もあったと思いますが、そういう弟子たち自身が神様に用いられて主の救いを語る者とされました。**生来の一人ひとりの個性**がここでも尊重されているのです。

そして、彼らの主にある交わり的一致は奇跡のようです。使徒言行録の2章44節以下にはこのようなことが記されています。—「**信者たちは皆一つになって、すべての物を共有にし、財産や持ち物を売り、おのおのの必要に応じて、皆がそれを分け合った。そして、毎日ひたすら心一つにして神殿に参り、家ごとに集まってパンを裂き、喜びと真心をもって一緒に食事をし、神を賛美していたので、民衆全体から好意を寄せられた。こうして、主は救われる人々を日々仲間に**

加え一つにされたのである。」—いいなあ、理想的だなあ、と思います。

初代クリスチャンたちは**持ち物の共有**ということをしていたのですね。これは社会主義や共産主義を推奨しているというのではなく、**自ずとそうなった**ということだと思います。誰もがその命を生きられるように、排除されないように、助け合ったのです。どうしてそんなことが出来たのか。書かれていますね。彼らはただ**神様を中心**にしていたのです。礼拝をし、主の晩餐式をし、讚美を捧げていた。**お互いに許し合っていた**交わりだったに違いありません。これは、イエス様が中心にいて下さる時にだけ可能となる交わりなのではないでしょうか？私たちの教会もこの精神に立ってゆきたいと思わされました。

【結】 キリストこそ私のすべて

「人のいのちは、持ち物にはよらない」と主はいわれました。私たちの人生、本当に一番必要なものは何なのでしょう。この**新型コロナ感染**が長期に広がる中、今後、感染者の数よりも、経済破綻や仕事の喪失などで死を選ぶ人の数は多くなるであろうという大学の分析があるそうです。これは人ごとではないかもしれません。また、あなたの隣人にそのような方はいらっしゃらないでしょうか。教会は、一体何を提供出来るのでしょうか？

内村鑑三が『基督信徒の慰め』という本の中でこのように書かれています。—「メソジスト派の始祖ジョン・ウェスレーが死ぬ前日、友人にこのようによく返し言った。『**何より善いことは神が私たちとともにおられることである**』と。神は財産に勝り、身体に勝り、妻子に勝るわたしの所有物である。富は盗まれる恐れと浪費される心配がある。国も教会も友人も私を捨てるだろう。事業は私を高ぶらせ、肉体もまたわたしはこれを失わざるを得ない。しかし永遠から永遠に至るまで私の所有できるものは神である。」

また、『感想十年』の中ではこのように書かれています。—「キリストは私に自己を下さった。彼にある命を下さった。聖霊を下さった。神と人を愛する心を下さった。忍耐と希望と歓喜を下さった。まことに、彼は神を下さった。彼は私の死んだ魂をお活かしになって、私を内に富みまた賢い者とならせて下さった。それにより**キリストは私のすべて**である。私の食物また衣服、また家屋である。彼はまた、私が神の前に立つ時の誇り（勲章）である」。

教会と私たちは「キリストの証人」となっているのです。キリストより頼もしい神、頼もしい友はいません。どのような時もこのお方と結びつき、このお方から力を頂くことが出来ますように。このお方は今も生きておられます。私たちの教会の只中に。あなたの只中に。幼な子のように単純になって、心を開きましょう。心に空っぽにして、このお方に入ってきて頂きましょう。新しくされ私たちは、聖霊なる神様の住まいです。お祈り致します。

愛する神様、感謝致します。あなたはこんな私たちをもあなたの住まいとして下さいます。そしていつも慰め、励まし、共に歩んで下さいます。どうぞ、イエス・キリストの霊、聖霊が与えてくれる自由と喜びの中に、隣人と共に生きさせてください。あなたの証人として今週も遣わして下さいますように。主イエスの御名によってお祈り致します。アーメン。